ある悪女の純愛劇

赤いトマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある悪女の純愛劇

【Ｎコード】
Ｎ４０６７Ｙ

【作者名】
赤いトマト

【あらすじ】
他人を優先する性格のヒロインは決まってみんなに愛される。私はそれとは真逆、自分のためにしか生きられない悪女だった。そのことを後悔したことはないけれど。そんな女が異世界にトリップして政略結婚させられる。愛してるっていうならお金頂戴、な彼女の純愛（仮）ストーリー。後々甘くなる予定。

０１　悪女と名乗る女の本音（前書き）

書き直しました。
申し訳ありません。

01　悪女と名乗る女の本音

本当はシンデレラになりたかった。
魔法使いに助けられ、白馬が似合う王子様に見初められる。
そんな夢みたいな話を心のどこかで信じていたのだ。

けれど現実はそんな理想と間逆、我ながらろくでなしと罵られても仕方のない女だった。

確かに他人のために生きる人生は素晴らしい。自己犠牲、他人主義、自分の身を投げ打ってまで他人に尽くす様は私も美しいと思う。そういう人達がどこかにいるおかげで世の中が成り立っているのも事実だ。どうぞどうぞ気が済むまでやってくれ。だが私はそうやって生きるのは真っ平御免である。

私は自分の欲望に忠実に生きることを選んだ。

所謂悪女みたいな生き方だ。阿婆擦れ、妖婦、なんと呼んでくれたって構わない。どうせ同じ意味である。
ただ、一つだけ言っておきたいのは誰にでも股を開いていたわけではない。
私は私のためだけに生きていた。自分にとって不利益なことは絶対にしたくなかったのだ。

それなりの貞操観念を持っていた私は、女の武器であるそれの代わりに自分の容姿を磨くことにした。異性は勿論同姓も、見た目麗し

い人間には口だけでも案外絆されてくれるものである。

世の中は所詮顔。第一に顔。女は可愛ければ可愛いほど良い。

性格なんて演じきってしまえば素の性格なんてばれやしない。そう分かった私は多大な金と手間を自分の容姿に費やした。遺伝子によってもたらされる差は大きいものだけれど、努力をすればそれなりの容姿を手に入れることが出来る。

周りに脇目も振らず自分を極めてきたおかげで、私は自他共に認めるほど可愛かった。

一般的には悪女と言われると私は赤いワンピースの似合う色気ムンムンの大人の女性を思い浮かべるが、私の顔は世間で言う清純系の顔。

赤いルージュよりも薄ピンクのグロスが、大輪の薔薇よりも密やかに咲くコスモスが似合いそうな顔の女を、誰が悪女だと思うのか。少なくとも私に引っかかった男達はそう思ってはいなかった。

私は私に擦り寄ってくる男をこれっぽっちも愛してはいなかったけれど、性格の悪さが露見することだけは絶対にしない。私は完璧主義者である。

彼等の理想の女の子像を一時も崩すことがなかった私に、貢いでくれる男達は誑かされていることなんて気づきもしなかっただろう。

ほら、私、見た目清純だから。

あることを証明するのは簡単だが、ないことを証明するのは非常に困難である。もっと言えば私の腹のうちなど、私がへまをしない限り誰も知ることは出来やしない。

良心の呵責など今更あったものじゃない。そんなもの腹の足しにもならない。
私は自分の欲望のため彼等を誑かし続けた。

そんなこんなで過ごしてきた二十数年。後ろから刺されるようなことをしている自覚はあるが、今まで五体満足で生きてこられられたのは私には悪運でもあったからなんだろう。
決して同性への配慮も怠らなかったため、人間関係も言うほど悪くなかった。

良くも悪くも私は上手く擬態出来ていた。
私の本音を知る人間など、結局最後の最後までいなかったのだから。

綺麗な姿で王子様のハートを射止めたシンデレラ。

射止めた人数こそ違うだろうけど、やっていることは一緒である。
所詮王子様も面食いなのだ。
ドラマチックな夢物語に憧れてていたことなど、とっくの昔に忘れていた。

０２　悪女が異世界に落とされる（前書き）

付け足しました。

02　悪女が異世界に落とされる

碌な生き方をしてこなかった私は、死んだらきっと地獄に行くんだろうとそう思ってた。
これが私の地獄なのか。いや、地獄だ。
死んだ覚えはないが、一足先に地獄にお邪魔してしまったらしい。

見知らぬ部屋。如何にも高そうな家具や装飾品が置かれているその部屋は、明らかに自分の部屋ではなかった。
まるで御伽噺に出てくるお姫様の部屋みたいだ。子どもの頃の私であったら喜んだだろう。

部屋を見回す私の視線はドン、と置かれたドレッサーで止まった。

「……なにこれ！！」

そして絶叫する。
ドレッサーの鏡には苦労と金を惜しげもなくつぎ込んだ私の唯一の誇りと言ってもいい姿がそこに映っていなかったのだから。
その代わりに見るも無残な女がこっちを見つめかえしていた。

肌が白くなったのは嬉しいが、一歩間違えれば死人にも見えるんじゃないかと思うほどの病的な白さ。
一ヶ月に一回は美容院に行って色と長さを整えていた茶髪のウェー

ブは、黒に近い青色をした何の手入れもされていないただ長いだけの髪になっていた。

私の努力の結晶何処に行った。

自分の姿が変わってしまうという異常事態よりも何よりも、私が手入れしてきた美貌がなくなった事実が何より精神的ダメージを私に与える。

よろよろと米神を押さえながら私はその場に座りこんだ。本当、なんだこの状況。

「…おお！！アリシア！目を覚ましたのか！」

いつの間にか入ってきたのかは知らないけれど、私以外居なかったはずの部屋に違う人間の声が響いて私はゆっくりと顔を上げる。

声がしたほうには「私が偉い人です」と言わんばかりの大層な服を着た初老の男がこちらを見てにこやかに笑っていた。

「……誰ですか？」

私が訝しげに声を出せば、その男は困ったように眉を下げて「いくら抜け殻だったとはいえ、娘にそう言われるのは悲しいな。」と呟く。その言葉に私はハッとして男と目線を合わせた。

聞き捨てならない言葉が聞こえたような気がする。

「娘？誰が？」

「お前がだ、アリシア。」
「……私アリシアって名前じゃありませんけど。」
かみ合うことがない会話に私は口元を引きつらせた。
私の親は仕事で家に帰ってこない父親と男と遊んでこれまた家に帰ってこない母親だと記憶している。まあそんな二人も私が学生だった頃に死んだけど。
しかもアリシアってどう考えてもヨーロッパとか、そっち方面の名前。生粋の日本人としては横文字の名前はむず痒い。
そんな私の思いに気づいたのか気づいてないのか、男はわざとらしい咳払いをした。

「色々と混乱はあると思うが聞いて欲しい、ここは今までお前が居た世界ではない。」

駄目だ、この人本格的に頭が可笑しい。
しかし本音をそのまま曝してしまうのは悪女として培ってきた建前が邪魔をしたのか「はぁ、」と気の抜けた返事をするだけに留まった。

「余の名前はアラン・バルト・クラーク。この国、クラーク国の王であり、今のお前の身体の父親でもある。」
威厳たっぷりに吐かれた自己紹介。今の私の気持ちを言うとすれば

「どうやら電波属性だったらしい、このおっさん」である。痛々しい。まだ私に色目を使ってくる色ボケ親父の方が扱いやすいだろう。

そう思って目の前の恥ずかしいおっさんをまじまじと見た。

……そういえば男の青みがかった色は、さっき鏡を覗いたときに見えた（私とは断じて思いたくないが）私の変わってしまった髪色と一緒だということに気づく。

何も言わない私を労しげに見て、男は言葉を続けた。

「その身体はな、生まれつき魂が入っておらず死んでしまうはずだったのだ。」

男曰く、その身体をなんとか男の魔法で今まで成長させ続けていたらしい。

そして違う世界でこの身体に入る予定であった魂を見つけ、今回この身体に戻すことが出来たそうだ。

これほど自身の魔力を使ったことはない、としみじみと語る男に私は目を点にするしかなかった。

頭がついていかない。

突っ込みどころがありすぎて、突っ込みきれない、というのが正確な表現である。

どういう風に振舞えば男が落ちるだとか、何処にお金をかければ綺麗になれるかだけを考えてきた頭には容量を遥かに超えた内容だ。

これは、どういう反応すればいいのだろうか。純情を気取ってさめざめと泣いてみるか、それとも、冷静に対応して成り行きに任せるか、迷うところであった。

「それは…どうも、ありがとうございます。」

私は後者にすることにした。ここで泣いてみてもこの異常事態から抜け出せるわけでもない。女の涙はここぞというときに使うものだ。それに泣くのにだって体力がいる。何の利益ももたらさない涙は流したくなかった。

自分としては出来の悪い反応だったが、王を名乗る男はそれに満足したのか、うんうん、と嬉しそうに頷く。
そして、手を叩き数名のメイド服を着た女達を呼び出した。

「お前の世話をさせる侍女達だ。」

目線を向けられた女達は恭しく頭を下げる。
見た感じ歳はバラバラであったが、中には男よりも年上だろう人も居た。

侍女、なんて言葉、普通日常会話に出てくることなんてないだろう。この状況を認めたわけではないが、少なくとも目の前に居る男の位が高いことだけは分かった。そういうのだけは目敏く反応するのである。

「今日は疲れているであろう。詳しいことはまた明日、宰相の方か

ら聞くといい。」

そう言って男が出て行くと残されたのは私と侍女と呼ばれたメイド服の人達。何時までも床に座り込んでいる私を立たせ、私に向かって全員頭を下げた。

「初めまして、アリシア様。私達がこれから身の回りのお世話をさせていただきます。」

「……ありがとうございます。」

「恐れ多い言葉、恐縮でございます。」

私も頭を下げるべきか悩んで、やめた。どう考えてもこの人達真剣にやってる。

どうやら本気で私の世話をする気のようだ。

やっかいなことになった。

大きなため息を吐いて、私は侍女達と向き合った。

私が名前を聞くと、敬語と姿勢を崩すことなく私から見て左側から順番に挨拶をしていく。

先ほどアランと名乗った男より歳をとったメイド、いや侍女の名前が「マリー」ということ以外は覚えられなかったけれど。

「貴方達は先ほどの方から説明は受けているんですか？」

「ええ。アリシア様のことはずっと伺っておりました。」

マリーが無機質な声で返す。

なるほど、一番偉いのだろう。周りの侍女は静かにこちらを見ているだけだった。

「そう、ですか。」
「アリシア様、明日、宰相であるフィリップ様がいらっしゃいますわ。そのときに全てをお聞きになられるかと。」

そういえばそんなことをアランは言っていた。それにのせられる訳ではないが、宰相に話を聞いたほうが具体的なことを聞けそうだ。男だったらもっといい。
そこまで考えて自分の容姿を思い出した。

鏡に映った幽霊のような自分。
苦虫を噛み潰したように顔が歪むのが分かる。

とりあえず身なりを整えることから始めよう、そうしよう。

０２　悪女が異世界に落とされる（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
ご期待に沿えることが出来るかわかりませんが、お付き合いくださると嬉しいです。

03　悪女の状況把握

目が覚める。窓から入ってくる太陽の光がダイレクトに顔に当たって眩しい。
瞼を開け見えたのはベッドに付けられたシフォン生地の天蓋だった。
私にこんな乙女趣味はない。

ということは、まだ私はあの姿なのか。

気が重くなるのを感じながら上半身を起こしドアの方を見た。
昨日紹介を受けたマリーともう一人、侍女が立っている。

「おはようございます。アリシア様。」
「……おはようございます。」
「仕度をしましょう、直にフィリップ様がお見えになられますよ。」

マリーがそう言って持ち出してきたのはコルセットと淡い水色のドレス。それに私は口を引きつらせた。あれを着るのか。

確かに豪華なものは嫌いじゃない。むしろ大好きだ。
高そうな布も、キラキラと光る宝石も、前の自分であったら喜んで身に着けただろう。

だが、それは私がそれに似合うと思っていたからである。

上質なものを着るのは可愛くなる上で必要だけれど、だからって自分の似合わないもの着るのは傍から見てかなり、見苦しい。
可愛くなるどころか逆効果である。着るものに着られては綺麗な洋

服もアクセサリーも台無しだ。

コルセットを身に付けられている間、私は憂鬱だった。
自分を姿を見ないように鏡を見ないでいたのだけれど、化粧をするから、とドレッサーの前に座らされる。
と、私は食い入るように鏡を見つめた。

「如何なさいました？アリシア様。」
「……案外悪くないかもしれない。」

後ろで侍女の二人が顔を見合わせるのが鏡越しに見えたけれど、そんなことを気にしている場合じゃない。

どうやら私に与えられた地獄は思った以上に甘かったらしい。
その事実に私は密やかに笑みを零した。効果音をつけるとしたら「にやり」だ。

「鋏を持ってきてください。」

侍女達に向かってそういえば、二人は首を傾げながらも早速鋏を持ってきた。

「初めまして、宰相を勤めさせていただいているフィリップと申します。」

仕度してから間も無く、何度も名前を聞いた宰相が私の部屋に現れた。見た目は３０代後半ぐらいで、鮮やかな青色の髪を後ろで束ねている。
染めた時に出る変な光沢はなく、その青色が地毛であることが分かった。

見た目麗しい、のだろうか。
クラーク国の人間はヨーロッパ系の顔立ちをしていてあまり違いが分からないのが正直なところだ。

「初めまして、アリシアと呼ばれています。」
「アリシア様、…その、随分と雰囲気がお変わりになられて。」

フィリップが控えめに言った言葉に私は笑みを浮かべた。それもそうだろう。
長いだけだった髪を肩より少し長いところでバッサリ切り、顔色の悪かった肌の色をファンデーションで隠している。それだけでも充分見れる顔になったと思う。

成長だけ促されていたというこの身体は何の手入れもされていなかった。

必要最低限の栄養だけで育ったためか腕や足はごぼうみたいだし、頬は痩せこけている。
それに髪の毛は梳かれたことが無かったようで絡まったまま、伸ばし放題。

そりゃ最初見たときは化け物みたいだと思ったわけだ。

ただ一つ、救いだったのは元はあまり悪くないということ。
いや、飛びぬけて良いわけではない。お世辞でも美少女とは言えないけど、不細工と罵られるほどではなかった。
これから時間をかけて変えていけばいい。心の中でほくそ笑む。

「ええ、どうでしょうか？」
「とてもお綺麗ですよ。亡くなった王妃そっくりです。」
「……そのことですが…、」

そう言って言葉を切れば、フィリップは「お話します。」と至極真面目な顔でこちらを見た。

「アリシア様の御身体についてはお聞きになられましたか？」
「……はい。なんでも魔法で成長させていたと。」
「その通りでございます。」

魔法なんて胡散臭い、そんな風に言ったつもりなのにフィリップは

当然のように肯定を返してくる。

「アリシア様がいらっしゃった世界では分かりませんが、こちらでは魔法という技術が発達しております。…まあ、扱えるのは魔力を持った人間だけですが。そして今回、長らく魔法で生き続けたアリシア様の身体に魂を呼び戻すことが決まったのです。」

あらかじめ用意していたようにぺらぺらとフィリップの口から出てくる言葉。

きっと聞かれることは大体分かっていたのだろう、私が口を挟む隙がなかった。喋り終えたフィリップは質問は？とでもいうように私に視線を向ける。

「貴女がこちらに来た経緯はご理解いただけましたか？」

「まあ、大体。でもなぜこの時期に？話を聞いてると、別にもっと早くてもよかったんじゃないですか。」

「本当は別世界でのアリシア様の死を待つ予定でした。別世界と時間の流れが違うのであちらで長生きされても充分間に合うはずだったのですが、そういかなくなりまして…。」

何が、といわれなくても分かった。

これくらいの歳の娘がすることなんて限られている。

「結婚、ですか。」

「その通りでございます。」

申し訳ありません、こちらに帰ってきてくださったばかりなのに。

そう言って眉を八の字にするフィリップとは反対に私は内心かなり

はしゃいでいた。

「相手は？」

気持ちを隠くこともせず弾んだ声でそう聞けばフィリップは困惑の表情を浮かべながらも答える。

「ルワーナ帝国、いや、クラーク国の隣の帝国の第二皇子である、エドウィン様でございます。」

「それはまあなんというか優良物件で。」

「……はい？」

「ああ、お気になさらず。」

第二皇子と言ってもその地位はかなり高いものだろう。そんな人がなぜ今まで動くこともなかったアリシアと結婚することになったのか聞いてみると、「他にこの国に王女が残っていなかったから」だそうだ。

「あの、お怒りではないのですか？」

「何故ですか？」

「…その、女性というのは好いた男と一緒になりたいと思うのでは…。」

気まずそうに申し出たフィリップは「それに向こうにもそういう人がいたのではないのですか？」と続ける。

まあ、そういう人が居なかったわけではないけど、愛は無かった。

（向こうからの愛はひしひしと感じたが。）

私が私のために生きていけるようにしてくれるなら男でも女でも、

たとえ別世界でも変わりはない。

その絶好の相手を用意してくれているというのに何故怒る必要があるのだろう。
私を心配していってくれた言葉なのだろうが、生憎今の私には必要がない。

「フィリップさんありがとうございます、心配ないですよ。」

私が笑みを浮かべればフィリップは納得のいかなそうな顔をしながらも頷いた。

０４　悪女が動き出す（前書き）

アクセス、お気に入り登録ありがとうございます。
皆様に楽しんでいただけるよう頑張ります。

０４　悪女が動き出す

「それで結婚まではどれくらいあるんですか？」
「三ヵ月後です。」
「それは、思ったより急ですね。」
「はい。それまでにアリシア様にはこの世界の知識とマナーについて覚えていただきたい。」
「……本気ですか？」
「本気です。」

フィリップとの会話を思い出して私は大きなため息を吐いた。
私の目の前には机いっぱいに広げられた分厚い辞書みたいな本の山。本のタイトルから読み取れば、私が今居るクラーク王国、並びにクラーク王家の歴史と、嫁ぎ先のルワーナ帝国についての本ばかりだ。
どうやらアリシアに成り代わる際、私の言語能力はこちらに適応されたらしい。
へにょへにょと曲がりくねった文字の意味が習わずとも理解出来た。都合はいいけれど、大量の本を前にしては微妙な心境である。一番上にあった本を手にとり、ぱらぱらと軽く目を通す、本の途中には地図が描かれていた。
「ルワーナ帝国ってクラーク国の何倍の面積なの…」
「約五倍でございます、アリシア様。」
「……早い返しをありがとう、マリー。」

ちんまりと描かれたクラーク国の隣には、今にもそれを取り込んでしまいそうなほど巨大なルワーナ帝国。
マリーの言葉に、何故この国がそんなに結婚を急いだのか理解出来た。

娘でも売らないと大きな帝国に飲み込まれてしまうわけだ、この国は。

「そういえばこの国には他に王女が居ないと言っていたけれど、アリシアは、いや、私は一人娘なの？」

私が敬語を使っていないことを気にすることもなく、マリーは「いいえ」と首を横に振った。

「アリシア様の上に御二人、王女様がいらっしゃいます。」
「その二人は？」
「違う国へと嫁がれました。」
「なるほど。」

まだ見ぬ私の姉達はもう売られた後だったようだ。地図にもう一度目を落とす。

クラーク国というのは微妙な場所に位置している。片側半分をルワーナ帝国と密着させ、もう片方は二つの国に挟まれていた。多分この二つの国に先に生まれた王女達は嫁がされていったのだろう。

そこまで考えてアリシアの父親である王を思い浮かべた。

あの時はそこまで気にしなかったが、自分の魔力を使わずとも魔道師を雇ってアリシアの身体を成長させ続ければいいのに、敢えてそれをしなかった王。

そして一度も口を開いたことが無かった娘の言葉に悲しそうな顔をしていた彼が、娘を国のために他国へ嫁がせたりするだろうか。

「王…父はこの結婚はどう思ってるのか知ってる？」

「最後まで反対しておられましたよ。先の御二人の結婚のおかげで国の財政も安定したので、フィリップ様の案を断りきれなかったようですが。」

ということは上二人の結婚もフィリップが持ち込んだことだ。

だからあんなに私が快諾しているのに戸惑っていたわけか。王が反対していたことを本人が躊躇なく頷いたのだから。

それから察するにフィリップの発言権はかなり大きいものなのだろう。

王の意思を左右するほど。まあ、どちらが国として正しいのかは明白だが。

「それじゃあ頼みごとをするなら王じゃなくてフィリップを通したほうが早そうね。」

国の財布の紐を握っているのは実質王ではなくフィリップなような気がする。

王女の結婚云々に口出せるのだから相当王から信頼を得ているのだろう。そんな彼なら欲しい物も手に入れやすそうだ。

私は手に持っていた本を積まれた本の上に置き、代わりにそれらの隣にあった手鏡を顔の前へと持ってくる。

鏡に映った顔をじっくりと見てみれば、色こそ違うけれどパーツ一つ一つは私が自分の世界に居たときと変わらないことに気づいた。きっとあっちで手をかけなければこんな感じになっていたんだろう。まあそれに加え今の身体は病気といわれても仕方ないほど痩せ細っているけれど。

「まずはこの容姿をどうにかしなきゃ。」

貰い先は決まっているも同然だが、醜いままでいるのは私のプライドが許さなかった。それに容姿は出来るだけ整っているほうが何かと役に立つ。

少々お金がかかると思うが、今の私は王女である。それくらい我侭いっても許されるだろう。

後でフィリップのところに行って頼んでみよう、と私は頭の中で計画を立てる。

自分でも悪い顔をしている自覚はあるがこの部屋にはマリーともう一人の侍女しかいない。（他の侍女達は部屋の外で仕事をしているらしい。）

「マリー、あとでフィリップのところに行く時間ある？」
「ええ。ですがその前に陛下と王妃にお顔を見せに行っていただきます。」

その言葉に私は数回瞬きをする。

「……両親ね。」
「御二人とも心配なされていました。」

全くそんな風に聞こえない平坦なマリーの声。そろそろ慣れてきたけれど。
それなら準備をしなくちゃいけないか、と私は腰を上げた。と同時にマリーの後ろに控えていた侍女がクローゼットの中からドレスを選び出す。

「あまり派手なドレスはやめて欲しい、今の顔じゃ似合わないから。」
「畏まりました。」

彼女と話すのはこんなときくらいだ。

マリーがいるから余計喋らなくなっているのかは分からないが、他の侍女は私とあまり喋ろうとはしない。
伊達に私も生きてきたわけじゃないのでその理由もなんとなく察しがついた。

大方今まで魔法で成長させられていた私が不気味でしょうがないのだろう。その反応のおかげでそれが当たり前ではないということがわかったのだけれど。

侍女が手に飾り気の少ないドレスを持ってきたのを見て、私は彼女に向かって微笑んだ。

「ありがとう。」
「え、あの、いえ…」
「ミランダ。」
「あ！……も、申し訳ありません…。」

礼を言われるとは思ってなかったのか（今まで言ってなかったからもあるけれど）慌てふためく侍女に向かってマリーが厳しい声を飛ばす。なるほど、侍女の名前はミランダというらしい。

「いえ、気にしないで。」

さて、そろそろ地盤も固めていこうじゃないか。
ここで生きていくには何よりもまず周りの人間の信用を勝ち取る必要がある。

そう思いながら私は彼女からドレスを受けとった。

０４　悪女が動き出す（後書き）

少し書き直しました。

０５　ある帝国での会話（前書き）

評価、感想、お気に入り登録、本当にありがとうございます。励みです！

拙い文章ですが、楽しんでいただけると幸いです。

05　ある帝国での会話

「本当に良かったのか？」

ルワーナ帝国の現皇帝であるセオドアが溜息と共に吐き出した問いかけは、広い謁見の間では響くことなかった。

「何のことでしょう？」

「分かってるんだろう、今回の婚約のことだ。」

その視線の先には、セオドアと同じ茶色の髪をした青年が困ったように笑みを浮かべている。

「今更ですよ。」

「しかし…」

「それに皇帝の御意向ならば、異論はありません。」

セオドアが言葉を続けようとするのを、目の前に立つ青年は強めの口調で遮った。しかしその声は食い下がるセオドアを咎めるというよりは、自分に言い聞かせるためにも聞こえる。

頑なな青年にセオドアは自身が座る玉座に深くもたれ掛かった。

「これは皇帝としてではない。……兄として心配しているんだ。」

そう言うとセオドアの弟である青年は躊躇うように視線を宙へ彷徨わせたあと、静かに目を伏せる。ありがとうございます、と呟かれた言葉は酷く小さかった。

けれど聞き取ったセオドアはやれやれと肩を竦め、ゆっくり首を横に振る。

私達の関係が兄弟から皇帝と家臣になったのは何時のことだったか。少なくとも、幼い頃はもっと穏やかであったように思う。

側室を設けることがなかった前皇帝は、セオドアや青年の母親である皇妃を愛していた。皇帝の愛は執着に近かったが、皇妃がそれに対して満更でもなかったように見えた。そんな二人をセオドアは快く思っていたし、それはきっと目の前の弟も同じことを思っていたはずだ。

全てが崩れ出したのは、皇妃が病に倒れたときだろう。

原因の分からない病は皇妃をみるみる蝕んでゆき、あっという間に彼女を死に追いやった。
それを期に父親は息子達に厳しくなり、やがて皇帝になることが決まっていたセオドアと、まだ１０にも満たなかった弟との扱いの差別化が始まったのだ。

最新の頃はそれでも仲良くしていたのだが、母親の後を追うように父親が亡くなって皇帝の座をセオドアが継ぐときにはもう、事務的な会話しかしていなかったような気がする。

こんな風に話すのも久しぶりだ。
話題が見当たらないことに焦ったセオドアは思い出したかのように声を出した。

「そういえば、騎士団副団長になったそうだな。」
「はい。団長から直々に。」
突然の話題に青年は内心首を傾げるものの、こくり、と頷く。実際のことを言えば騎士団副団長に選ばれたのは結構前の出来事なのだが、青年はそのことを口に出さなかった。

「副団長にもなれば鎮圧の際、必ず連れていってもらえるのでとても光栄です。」

何となしに言われた青年の言葉に緩まりかけていたセオドアの口元がピタリと固まる。

「……そこなのか？」
「え？ああ、はい。」

本気でそう思っている様子の青年にセオドアは頭を抱えずにはいられなかった。
どうも自分の弟は自分の価値が分かっていないらしい。

副団長だからといって、鎮圧に赴かなくてはならないという規則はない。
それに彼が背負う地位を考えれば死ぬ危険性がある場所には出来るだけ行かないで欲しいと思うセオドアだが、騎士団入隊する時、皇帝の立場を使っても揺るがなかった青年を思うときっとなにを言っても聞かないだろう。

「何故そんなに生き急ぐ、エドウィン。」

低くそう問えば、エドウィンと呼ばれた青年は薄く笑った。

「兄上が知ることではないですよ。」

では鍛錬がありますので、と広間を出て行こうとするエドウィンをセオドアは呼び止める。振り返ったエドウィンの顔は影になって表情が上手く見えない。

「政略結婚だが、妻が出来るんだ。……自分を大切にしろ。」

セオドアの言葉にエドウィンは何も返すことはなく、曖昧に微笑んだだけであった。

０５　ある帝国での会話（後書き）

誤字修正しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4067y/

ある悪女の純愛劇

2011年11月17日23時36分発行